イ ン ド ネ シ ア 共 和 国

ジャカルタ日本人学校（Jakarta Japanese School）

後　　志　　留寿都村立留寿都中学校
教　　諭　　花 坂　　し づ
（派遣期間　2002 年４月～ 2004 年３月）

１．インドネシアについて

（１）地理

・　総面積約 192 万ｋ㎡（日本が約 37 万ｋ㎡）で、日本の約５倍強。赤道をはさみ、東西 5100 ㎞・南北 1900 ㎞にわたって点在する島々はその数約 18000。「赤道にかけられたエメラルドの首飾り」と呼ばれる程、豊富な地下資源と緑豊かな自然環境に恵まれた、世界最大の群島国家である。

　地理的には、北緯６°から南緯１１°、東経９５°から東経１４１°に位置している熱帯である。環太平洋火山帯に属し、全国に１２８の火山があり、そのうち７８が活火山である。

　時差については、インドネシアには西部、中央部、東部と３つの時間帯があり、西部にあるジャカルタは日本より２時間遅れとなっている。

（２）人口

・　推定約２億１５００万人で世界第４位。年間２％以上の割合で増加している。人口分布は著しく不均等で、国土総面積のわずか６．９％のジャワ島、マドゥラ島に人口の６１％が集中している。中でも特にジャカルタ市内の人口密度は高く、推定人口は１億人とも１億２千万人ともいわれている。２７種族に大別される。多くの部族と言語・方言が同居する多民族国家である。

（３）宗教

・　インドネシア共和国は一種の宗教国家です。国家５原則『パンチャシラ』は、その第一原則として「唯一至高神への帰依」を挙げ、憲法第２９条には「国民の信仰の自由及び宗教的義務遂行の自由の保障」を規定している。インドネシアの国家・国民生活において宗教は重要な位置を占めている。

　国民の約９０％はムスリム（イスラム教徒）であり、インドネシア社会におけるイスラムの中心性は顕著である。しかし、イスラム教は国教ではない。憲法は特定の宗教には言及せず､政府はイスラム教とともにキリスト教プロテスタント、同カトリック、ヒンズー教、仏教の５大宗教を国家公認の宗教と定め、平等に憲法上の権利保障の対象とする基本方針をとっている。公認以外の宗教や無神論は許されていない。国民は公認宗教の内いずれかを選び、住民登録や国税調査などの際に申告する。

（４）気候

・　一般的には熱帯性で、年平均気温は２７℃前後。季節や温度の変化はほとんどない。
　１年は、雨季（１０～４月）と乾季（５～９月）の２つに区別されている。
　雨季は、１日中雨が降っているのではなく、主に夕方に雷雨が降り、またやむといった程度。また、乾季にはほとんど雨がなく、気温も比較的高い。

校門横のバナナの花と若い実

（５）言語

・　公用語はマレー語を母体としたインドネシア語で、地方語はジャワ語・スンダ語など約２５０あると言われている。

（６）習慣（マナー）

・　左手は不浄とされているので、物の受け渡しや握手をするときは、必ず右手か、両手を（左手は添える感じ）使うようにしている。
　頭は神聖な場所と考えられているので、宗教を問わず頭を触られることを嫌う。
　インドネシア人は誇りが高く、人前で怒ること、怒られることを嫌うので、大声で怒鳴ったりせず、穏やかに対応する。
　朝夕１日に２回、また儀式や祭礼の前、人を訪問する前、客をもてなす前にマンディ（水浴び）をする。ムスリム（イスラム教徒）は一日に５回お祈りをする。
　また、豚は不浄なものと見なしている。イスラム暦第９月に当たるラマダンの間は、日の出から日の入りまで断食を行う。ムスリムの習慣を理解し尊重することがインドネシアでの生活では大切である。

（７）多様性の中の統一

・　国章ガルーダ（神鷲）の中には『ビンネカ・トゥンガル・イカ（多様性の中の統一）』の文字が記され、国の標語にもなっている。1945 年 8 月 17 日の独立以来、「一つの国家・一つの言語」をめざして、数多くの難題を抱えながらも『統一』を図っている。

『パンチャシラ　PANCASILA』　《国家５原則》

①　唯一神への信仰　（　星　）
②　民族主義　（菩提樹）
③　人道主義　（　鎖　）
④　民主主義　（野牛）
⑤　社会正義　（稲穂と綿花）

①

②

③

④

⑤

２．ジャカルタ日本人学校について

（１）ジャカルタ日本人学校の概要

・　ジャカルタ日本人学校（Jakarta Japanese School　以下ＪＪＳ）は、インドネシアの首都ジャカルタ市の南西に隣接するバンテン州タンゲランのビンタロ地区にある。周囲は、住宅や田畑に囲まれている。

・　１９９６年４月にジャカルタ市内のパサールミング校舎から現在地のビンタロ校舎に移転。敷地総面積７４，４５６㎡。
　３階建ての校舎３棟が渡り廊下でつながっている。（小学部棟２棟、中学部棟１棟）
吹き抜けの風通しのよい構造になっている。

ＪＪＳ航空写真現在は空き地部分が住宅地となっている

・　小学部、中学部それぞれにグラウンド、体育館、プール、ＰＣ室がある。
　体育館を含め、校舎内のすべての部屋にＡＣが設置され、約８４０人の生徒が毎日の学校生活を快適に過ごせるようになっている。

（２）ＪＪＳの学校経営の基本方針

・　インドネシア政府の理解と認可を得ることによって特有な教育活動の推進が可能となっている。
　本校教育活動は日本国内の初等中等教育の課程と同等の教育を行うことを目的とする。
　また、海外における教育という特性を生かして、多様な価値を理解し共生できる国際性豊かな日本人の育成を図る。そのため、
　①基礎・基本を重視し、一人一人の個性を生かす教育
　②国際理解教育及び現地校等との交流活動を推進する特色ある教育
　③魅力ある楽しい学校づくりをめざして努力する。

（３）ＪＪＳの学校教育目標

・基本目標　◎豊かな心をもち、主体的に生きる子の育成を図る
　・　人間尊重の教育
　・　感性豊かな教育
　・　個性尊重の教育
　・　国際性を培う教育
　○　よく考える子
　○　思いやりのある子
　○　体をきたえる子
　○　世界に心をひらく子

下校バスの見送り

（４）魅力ある楽しい学校

・　ジャカルタ日本人学校は，本校に学ぶ児童・生徒のためにある。そして創立３５年以上にわたる歴史と伝統に込められた邦人社会と保護者の熱い思いと期待に応える、魅力ある楽しい日本人学校でありたい。

　信頼できるということは安心できるということであり、期待できるということは活気があるということである。さびしい子がいてはならない。

＊子どもたちにとって

①　かけがえのない自分を大切にできる学校
②　知る喜び、学ぶ楽しさを実感する学校
③　互いに支え合い、結び合う活気に満ちた学校

廊下で昼食

＊保護者にとって

①　思いが聴かれ、願いや意見に誠実に対応する学校
②　邦人社会や現地住民に開かれた学校
③　個性のある教育課程を実践する学校

＊教職員にとって

①　児童生徒の望ましい成果をめざし，ともに汗を流す学校
②　教育愛・人間愛に燃え，児童生徒とともに成長する学校
③　生きがい，やりがい，働きがいのある学校の創造をめざして努力する。

（５）安全対策

・1998 年の暴動の教訓をもとに校内には「安全対策委員会」が組織され、緊急事態にすぐ対応できる体勢がとられている。

　その他具体的な安全対策としては、緊急連絡網（連絡網には、自宅電話番号の他に携帯電話番号及び通学方法・バスナンバーなども記入されている）の整備や携帯電話（いつでも使えるよう電池残量の管理、プリペイドカードの予備の用意）の常時携帯などの他に、学校内には臨時宿泊用のバスタオル（生徒が個々で用意した物を学級で保管）や全児童生徒分の１日分の食料と水が常備されている。「学校に不審物を仕掛けられた」ことを想定しての避難訓練も行われた。

・私が赴任していた２年間では、臨時の早帰りは「洪水」による１回だけであったが、毎学期行われている「バスイクット（教員が担当バスに乗車し、生徒の下校を実際に確認する）」のおかげで全教職員が落ち着いた対応をとれ、日頃の訓練の大切さを実感した。

たのもしい警備員さん

　また、校門と校舎入り口の２カ所に警備員が配置されている。バリの爆弾テロ事件以後は、校門での敷地内に入場する車の車内の金属チェック（爆弾の持ち込みへの対策）、校内パトロールも常時行われるようになり、教職員の危機管理意識が一層高まった。

（６）児童生徒の学校生活について

①児童生徒の１日

・ほとんどの生徒が約４５台のスクールバス（含むアパートバス）で通学している。暑さと交通渋滞を考慮し、児童生徒は、７時半くらいまでに登校してきている。そのため、中には自宅を朝６時前に出発している児童生徒もいる。

教室での昼食

・水道の水は飲めないため、水筒を持参して登校してきている。昼食は、弁当。その他に、２時間目と３時間目の間に中間休みを設け、持参した軽食（通称：「中間食」おにぎりやパン等）をとることができる。

※朝食を６時前に終えている生徒に配慮して。売店でパンやジュースなどを購入することもできる。

・１時間目は、８時開始。６時間目が終了するのが１４時０５分。スクールバス出発が１４時３０分となっている。

・週２回（火曜日・木曜日）、５年生以上の希望児童生徒が部活動に参加している。約１時間程度の活動であるが部活動によっては、近隣の現地校やインターナショナルスクールと交流試合を行っている。

売　　店

交流試合後の記念写真

②学習内容

・学習内容は、日本国内と同じ教科に加え、英会話の時間が設けられている。（小学校１年生～３年生：週１時間、小学校４年生以上：週２時間）

５名の英会話教師が常勤している。

・総合学習は、「インドネシア理解学習」、「インドネシア語学習」、「交流学習」の３つを柱として学習を進めている。

・体育の授業で「水泳」が通年で週１回行われている。

③学校行事

・小中合同で開催される「体育祭」、「ＪＪＳフェスティバル」（文化祭）の他学年、学部ごとに国内同様さまざまな行事が行われている。

　年間行事計画を立てる際、インドネシア国内の情勢を考慮している。２００４年度の計画では、「大統領選挙」及び「イスラム教の断食明けの休暇」時期などを考慮しながら計画された。

※２００２年度の中学部修学旅行は、爆弾テロ事件発生により、当初のバリ島から実施時期を延期したうえ、シンガポールに変更された。

（７）ＪＪＳ中学部について

①「責任ある自由」・「人を大切に、物を大切に」

中学部のモットーである「責任ある自由」のもと、生徒がのびのび学校生活を過ごしている。生徒指導においては、「人を大切に、物を大切に」を合い言葉に個性あふれる生徒たちが互いに思いやりながら学校生活を送っている。

②学級数

９８年の暴動以後、１学年２学級が続いていたが、２００３年度の１学年が３学期に入り４２人学級となったこともあり、検討の結果２００４年度から１，２学年が３学級となった。これに伴い、維持会派遣の教員が１名増員された。

ここ数年、中学部の生徒数は、横ばいもしくは増加傾向である。年度途中での学級数の増減ができないという学校事情もあり、次年度の学級編成に悩まされる状況が当面続きそうである。

③小中合同の活動

～体育祭～

中１男子「ムカデ」練習中

毎年盛大に開催される、ＪＪＳ体育祭。この行事は、各組の応援団員を中心に準　備が進められている。体育祭前の休み時間は、応援団員が小学校低・中学年の児童にわかりやすく、やさしく応援練習を指導する姿が見られる。

５年生以上で構成される応援団員は、低・中学年の児童にとってあこがれの存在である。なかでも、応援団長へのあこがれが非常に強く、体育祭終了後も休み時間に応援団長たちに会うために、中学部棟まで遊びに来る児童も少なくない。

小・中学部が同じ敷地内にあり、合同行事があればこそできることであるが、年１回のこの「体育祭」によって小中の絆が深まっている。

応援合戦と並び、体育祭の名物となっているのが中学部男子による「組体操」である。毎年のようにけが人が出てしまうほど緊張感あふれる技の練習に取り組んでいるが、「体育祭」が終わるころには、男子生徒たちの顔つきが変わるほど行事を通じて子どもたちの大きく成長する姿が見られる。

「四段円塔」の練習中

小学部１年生から中学部３年生までが一丸となって熱い応援を繰り広げる体育祭

～ＪＪＳフェスティバル～

昨年度で４回目となった「ＪＪＳフェスティバル」は、２日間にわたって行われ　ている。小学校の学習発表会（学芸会）とお楽しみ会そして文化祭があわさった内容が盛り込まれているため、小学部、中学部が互いの発表活動を見合うのが正直厳しい状況である。

以前、バラバラに行われていたものを小・中学部の交流を深めるために合同開催された経緯もあり試行錯誤しながらより交流が深められる行事へと年々改善されつつある。

開会式での中学部合唱

フェスティバルでは、児童・生徒がデザイン画を描いたＴシャツが３種類販売され、おそろいのＴシャツでお祭り気分を盛り上げている。

ＪＪＳフェスティバルＴシャツ

２００２年度から開会式の中に中学部合唱を取り入れたが、２００３年度からは、インドネシアの曲を歌うよう変更してきている。インドネシア国内で年齢を超え親しまれている曲の合唱は、日イの交流行事などでも発表される機会がある。

その他、ＪＪＳフェスティバルでは、ステージ発表、中学部合唱コンクール、中学部２年生による屋台などが行われている。

（８）総合的な学習　～　「インドネシア語」・「現地校との交流」・「インドネシア理解」

①交流活動の概要及びインドネシア語学習について

ＪＪＳでは、すべての学年が国際交流ディレクター及びインドネシア語の先生の助けを受けながら、学年ごとに交流活動を行っている。交流相手校は各学年ごとに決定し、年間を通じて交流を行っている。中学部１年生の交流活動は、相手校で１回、ＪＪＳで１回、日イ友好親善キャンプが主となっている。

インドネシア語学習は小学部３年生から始まり、各学年２０時間をめどに取り組んでいる。２００３年度までは、クラス分けをせずに共通内容でインドネシア語学習を進めてきていた。しかし、ＪＪＳ生徒の実態として在インドネシア年数がさまざまである。当然インドネシア語の能力差が大きい。そこで、昨年度からインドネシア語教員との面接の上３クラスに分け、同じ単元、ねらいで内容をクラスごとに変えて行うようになった。

クラス分けを行った結果、今までよりも学習内容の定着が図られた。しかし、クラス分けをしてもなお依然として解決できない問題が残されている。それは、一部の生徒のインドネシア語を含め、インドネシアを軽んじる態度である。交流活動などを通して、この「心」への働きかけが何よりも大切だということをあらためて感じた。

お世話になったインドネシア語の先生方

②アンニサー校との交流学習

平和への願いをこめて一緒に制作したﾊﾞﾃｨｯｸ（ろうけつ染め）

　アンニサー校は、ＪＪＳから車で１０分ほどの所にある私立の小中学校である。ＪＪＳとの交流活動に熱心に取り組んでくれている。そのため、小学部の多くの学年もアンニサー校との交流学習を行っている。

　２００３年度の交流学習を行うにあたり、事前にアンニサー校を訪問し、１年間の活動についての打ち合わせを行った。一人一人の小さな交流を大切にするためにこの１年間に行うすべての交流を同一のグループで行っていくことを確認した。これは、過去の交流後の「交流相手校の子と一言もしゃべらなかった」、「誰が誰だかわからなかった」という子どもの感想を聞いた反省から交流の一つの柱として「互いに顔を覚え、名前を呼び合う交流」にしようと思ったからである。

③日イ友好親善キャンプ

　昨年度で２６回目となった日イ友好親善キャンプ（以下、日イキャンプ）は、ＪＪＳを会場に中学部（３年生は受験のため一時帰国している生徒が多いため参加は少数）と各学年の交流校が参加して１泊２日の日程で行われている。以前は、ＪＪＳがホストとなり、交流校はお客様的な参加の仕方であったが「交流の１年の締めくくりとなる行事」となるよう事前に各校の実行委員が集まって話し合いを持つなど改善され、ともに作り上げる行事になってきている。当日、久しぶりの再会では、名前を呼び声を掛け合う姿も見られた。

　交流活動の「校内オリエンテーリング」の各チェックポイントでは、日本語・インドネシア語・英語に身振り手振りを交えて協力しながら楽しんでいた。夕食後、体育館でゲームや各校の代表によるステージ発表が行われた。最後に全員で「ＷＡになって踊ろう」を踊り、アセアン交流コンサートのテーマソングを日本語・インドネシア語・英語の三カ国語で歌い、暑い・熱～い夜が過ぎていった。日イキャンプ後の子どもたちの感想文からもこの時の感動と興奮が伝わってきた。

④インドネシア理解

　体験、調べ活動などを通じた学習が中心となっている。自分たちが知りたい「インドネシア」をテーマに選び、グループごとに学習を進めている。６年生を招いて行った調べ学習発表会は小・中のよい交流の場ともなった。これらの学習を進める上でゲストティーチャーの存在が非常に大きい。

　２年間のＪＪＳでの毎日を今振り返ってみると、様々な場面で周りの人に支えられているということにあらためて気づかされる。現地の気候や生活習慣になれるまでは体力的に非常にきつく感じることもあったが同期の仲間をはじめ、ジャカルタ生活の先輩である同僚、保護者の方々に助けられながら無理をしすぎないよう心がけながら自分にあった生活のリズムをつかむことができた。１日も休むことなく勤務することができたことにあらためて感謝の念でいっぱいである。

　インドネシアのジャワの農村には「gotong　royong（ゴトン･ロヨン）」という相互扶助の慣習がある。私のジャカルタでの毎日がまさに助けられ、支えられ成長の場を与えられた「ゴトン･ロヨン」の日々であった。

　インドネシアという国に関われたことで北海道では、できない多くの貴重な経験をすることができました。有意義な研修の機会を与えてくださったことにこの場を借りてお礼を申し上げます。